時拾

特56
638

伯母捨

昔、信濃の国に、姨捨山といふ所、いと遠き所にあり。伯母捨てつる人なんなりける。

是は信濃国、信濃の何郡とかいふべし。我国にも、姨捨山、山城の国、一つ在りけり。

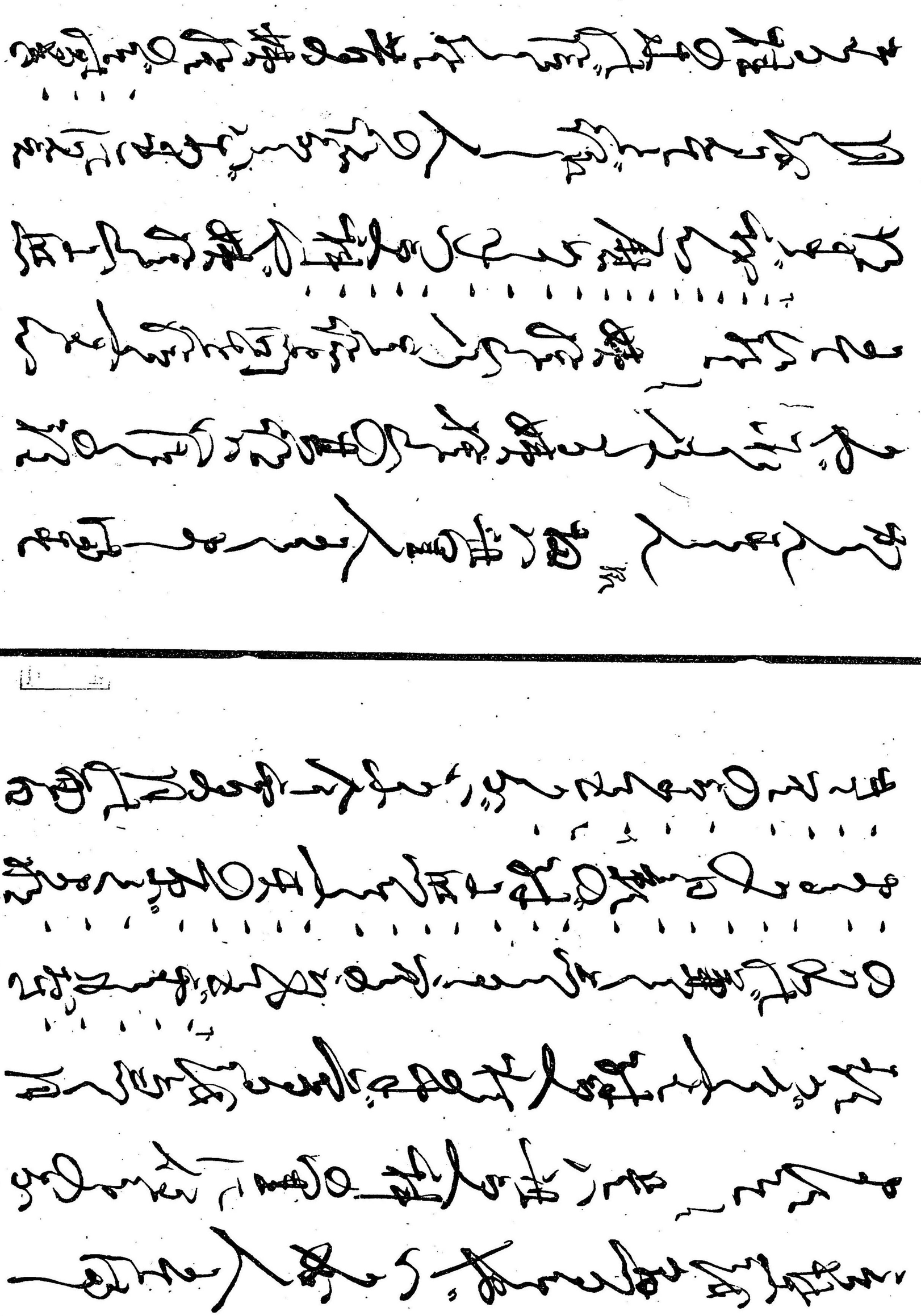
山城の国にも、一つ在りけり。

昔、男、女、年少くて、京に有りけり。

男、妻、子、母、妹、住みけり。

月は猿らはときは此程の名もなし猿
猿の事ほとく又さする中宿のゆし
なして行猿よれるく家を定科や姨
猿山よ妻をうく秋猿山に上りてこれ
山嶺ほ年みて万里の先目おかしからず
かく月のさらあときはやるゝ今宵の是れ

いつかは猿得ある人花ぐものを成形
うつかるあし面白や此程るりて月を
猿が土の物語にせうやとくはなへて
猿人何とて此山よ住しゐるて らは
やちよまよ本の釼か 宮よりて山猿なん
えいあかりけども女性え人まちつゞ秋ふ



松は萬木にすぐれて　十八公のよそほひ
千秋の緑をなして　古今の色を見ず
始皇の御爵に　あづかるほどの木なりとて
異国にも本朝にも　万民これを賞翫す
けふ(?)よりは(?)式(?)京の　風も(?)すゞ(?)し　松の心(?)
さ(?)るにても暦(?)めつ(?)文科や　好文(?)の

夕暮に梢もうつるはなの緑りを
みつて松の緑色(?)深く(?)色を(?)ます(?)
今も云渡り(?)風(?)吹(?)やまずて(?)さえ(?)
此(?)のみちの(?)はしく　いふ(?)人(?)は(?)ゆく(?)
春のみ(?)ぞ　是は老(?)の喜(?)図(?)の春(?)の
秋(?)を(?)するの(?)花(?)も(?)ありて今も(?)名(?)有(?)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゞゆきとみえて来よりし夕顔
なるる月かげのくまやをかしく雨夜や
万里の空もくもりて住家の枕も多く
なれやさまよひて夜はすがら　三五夜中
新月の色二千里外の故人の心あり
面白のをりからや折しもこよひの空

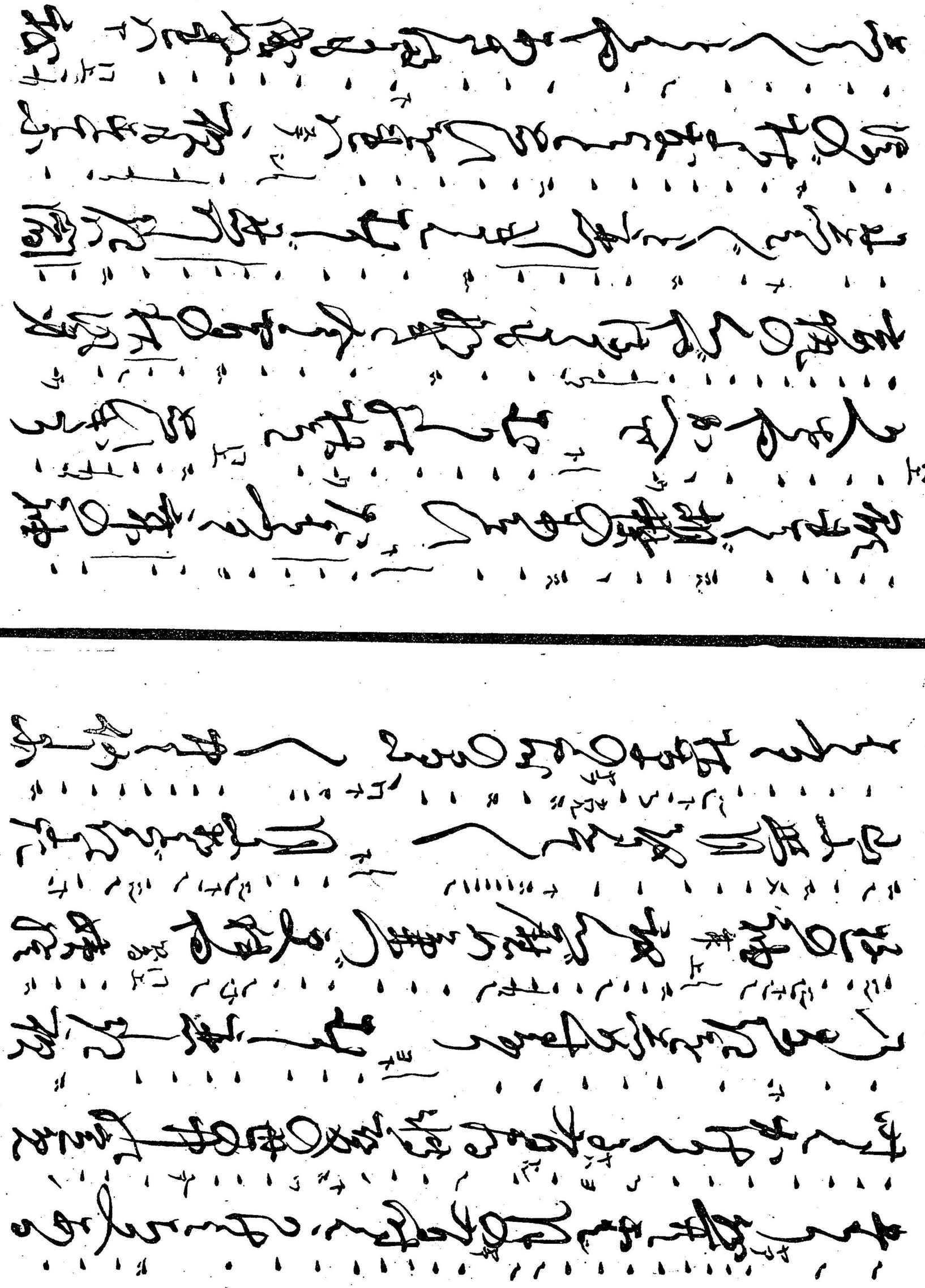
るなへし今宵の月ぬきれのしかかなし
まれ枕待ちてたゝくひなきなとあま月の
あくる又も人を恨みかけれはきやさ咲きぬる
山の林のえ娘の小袖あやかれてぞ又さ
みなみもいさや　うきやかうけも此
そよ月の程よりけふの女人成仏の人ばかり

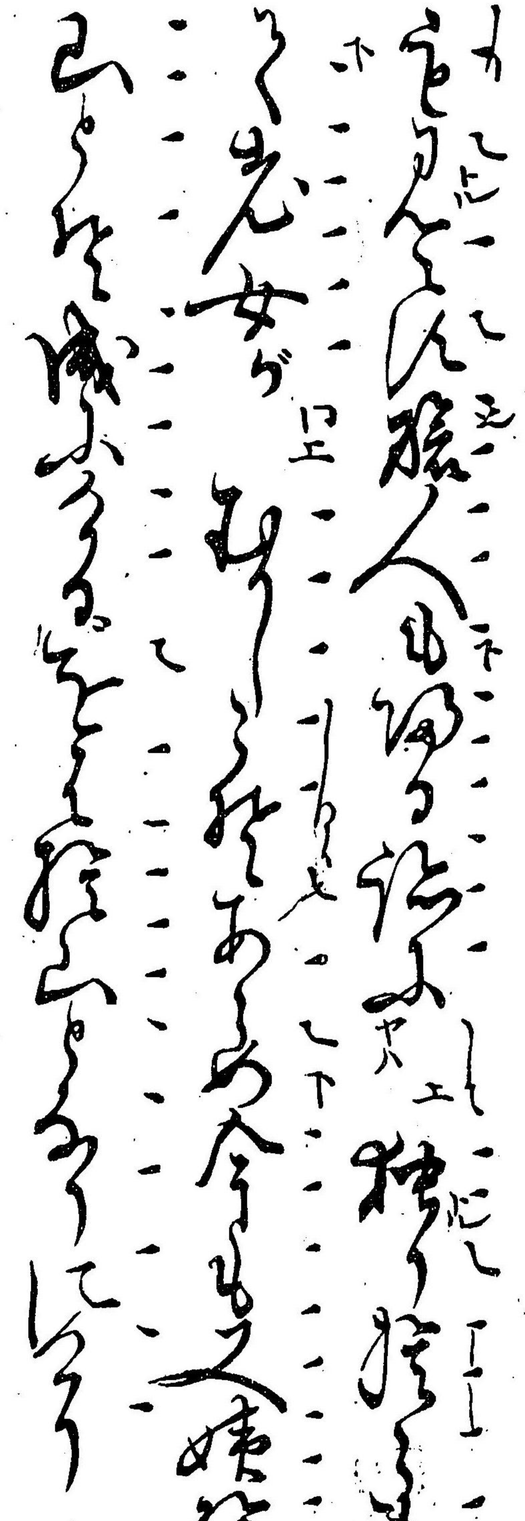
又姨捨の山にきて面白しかれの月まえん
ゆきま取り何や何のも愛の世中と
いつおもふ見えハ其名も月よみ
らうあん実や具よ八月も来具
はまぐりとまつも今のおりとあふまた今
宮のえのきみ筆まふ日の名残つ

是ハあまたまさりしかや　姨捨山の田ごとより
あらはに一輪もてる清光の表圍くもりて海
漂を離れ　命も法仏の光　いつ
も勝劣なりと　超世の光我等が為
ことさら名のよみくなほ主任を三尊西
丑行くのへ産生知らく弥勒にしまひ勢人の里

生のうちなんとこや月々彼の木の花の名ぞ経る
しゝがりのことに導き祀をとゝのひ
まる天上の力ならず願ふ大勝利と号
すとうて冠のるに月のえりやさしき高
乃粉に仕方の序をわきて御殊様も
風のあるまゝ行く月ゆくへかりしにわかうく

方れ何く華さをまてに咲ける室の池の出水
主や葉末の花をちて芳芳葉をりに流
ますらを　逆後頻伴りくしるき　声鋭
まさへつくろふ蝶みおれ雀鵜鶏の羽をさる
はかなるのおもひくさかみを母まへくれ
あるしのゆくはなきれい云遠きへとかた付





明治廿一年四月十日訂正印刷
同　年四月十九日發行

東京市赤阪區青山南町五丁目三番地
訂正者　金剛鈴之助
京都市下京區室町通四條上ル六番戸
訂正者　金剛直喜
京都市上京區二條通御書町東一番戸
發行兼印刷者　檜常之助

版權所有